

黙従に見る敬虔と盲信

—アブラハムのイサク献供（創22:1-19）をめぐって—

山 吉 智 久

黙従に見る敬虔と盲信 ——アブラハムのイサク献供(創22:1-19)をめぐって——

山 吉 智 久

Tomohisa YAMAYOSHI

目次

はじめに

1. 物語の概要と構成
2. 鍵語と主題
3. 黙従に見る敬虔
4. 黙従に見る盲信

おわりに

【Abstract】

Piety and Blind Belief in Acquiescence: On the Sacrifice of Isaac (Gen 22:1-19)

The story of the sacrifice of Isaac (Gen 22:1-19) is one of the most attractive but also most difficult passages in the Old Testament. Abraham faces the dilemma that if he will be faithful to the command of God, he must slaughter his only son. Based on the structure and the specific terms used in the story, this study is an examination of its theological and ethical significance. By repeating several words and phrases, the author relates all the sections of Gen 22:1-19 to one another. In Abraham's conviction expressed in the words in the story, we see his absolute trust in God. However, when compared with the passage in Gen 21, the suppressed description of his feelings implies that Abraham is engaged in fanatical behavior, unaware that he is undergoing a trial from God.

はじめに

旧約聖書には、読む人を強く惹きつけるのと同時に、理解することが非常に難しい箇所が少なくない。『創世記』22章に収録されている「アブラハムのイサク献供」の物語は⁽¹⁾、その最たる箇所の一つであろう。古代から現代に至るまで、この物語は、聖書学者にとどまらず、哲学者や芸術家たちにも大きな影響を与えてきた⁽²⁾。イマヌエル・カントの『諸学部の争い』(Der Streit der Fakultäten, 1798年)⁽³⁾、セーレン・キルケゴールの『おそれ

とおののき』(Frygt og Bæven, 1843年)⁽⁴⁾や、レンブラント・ファン・レインの『アブラハムの供犠』(Het offer van Abraham, 1635年)⁽⁵⁾などの他、イスラエル北部のベト・アルファ(Beth Alpha)から発見された、紀元後6世紀の会堂(シナゴグ)址の床面を飾るモザイク画の中には、このアブラハムによるイサク献供の場面が、実に素朴な形で描かれている(図表1参照)⁽⁶⁾。

この物語がとりわけ読む人の頭を悩ませるのは、アブラハムが神の言葉に忠実であることによって、わが子をささげることになる、

キーワード：旧約聖書、『創世記』、アブラハム、敬虔、盲信
Key words: Old Testament, Book of Genesis, Abraham, Piety, Blind Belief

というジレンマであろう。ただでさえ暴力的で評判の芳しくない旧約聖書にこのような話があること自体が大きな躓きとなることが少なくない⁽⁷⁾。われわれは他ならぬ聖書に収められたこの物語から、一体何を読み取れるのだろうか。本稿では、特定の立場や理解を前提にすることなく、原典のヘブライ語テキストそのものに真摯に耳傾けてみたい。

1. 物語の概要と構成

最初に、物語の概要を述べつつ、全体の文学的な構造に関わる特徴的な表現を示す。まずは、物語の区切りを探そう。注目すべきは、22章の1節と20節に見られる、「これらの事の後のことである」(*way'hi 'aḥar hadd^obarim ha'ellah*) という表現である⁽⁸⁾。1節のこの表現の前には、アブラハムによるアビメレクとの契約締結(21:22-34)がある。もう一方の20節のこの表現の後には、ハランの娘ミルカがアブラハムの兄弟ナホルとの間に産んだ子らについての報告(22:20-24)がある。これら二つは、いずれも1-19節とは異なる人物たちが登場して展開される話であることか

ら、1節と20節にそれぞれ物語の切れ目を見出すことができよう⁽⁹⁾。

22章1-19節の物語に登場する人物は、アブラハムとその息子イサク、二人の若者たち、神ならびにヤハウエの御使いである。中でも目を引くこととして、イサクについては、その名だけでなく(*yīṣḥāq*, 2.3.6.7.9節), 「息子」(*bēn*, 2.3.6.7.8.9.10.12.13.16節), 「あなたの愛する者」(*'ašer 'āhabtā*, 2節), 「ひとり子」(*yāhīd*, 2.12.16節), 「その若者」(*hanna'ar*, 5.12節)と、さまざまな形で呼ばれている⁽¹⁰⁾。

本章句の大きな特徴に、ある特定表現の繰り返しが多用されているということがある⁽¹¹⁾。

「(神がアブラハムに) 言う」(*'mr*) がその一つである。神からの命令の中で、「わたし(=神)があなた(=アブラハム)に言う」(2節)という言葉によって、アブラハムが向かうべき場所が指示される。3節では、この言葉を受けて、「神が彼(=アブラハム)に言った場所に」出発し、9節では、「神が彼(=アブラハム)に言った場所に」到着する。このように、「(神がアブラハムに) 言う」という表現によって、目的の「場所」(*hammaqôm*)



図表1 アブラハムによるイサク献供(ベト・アルファの会堂床面モザイク, 部分)

に向けた登場人物たちの移動の様子が効果的に描き出されている(4.9.14節)⁽¹²⁾。この「場所」をめぐる表現を目安の一つとしつつ、本章句は全体を、「プロローグ」(1-2節)、「その場所への道のり」(3-8節)、「その場所で起こったこと」(9-14節)、「エピローグ」(15-19節)という四つの段落に大きく区分できる。本章句の構成は、およそ以下のようにまとめられよう⁽¹³⁾。

1-2節 プロローグ

1-2 神の命令

3-8節 その場所への道のり

3 行動に移るアブラハム

4-6a 父子二人となる

6b-8 父子の会話

9-14節 その場所で起こったこと

9-10 イサク献供の準備

11-12 天からの声(その一)

13 代替の雄羊の献供

14 その場所の命名

15-19節 エピローグ

15-18 天からの声(その二)

19 ベエル・シェバ滞在

物語は、ある日、神からアブラハムに言い渡される命令によって幕を開ける(1-2節)。モリヤという地に「行き」(*hlk*)、アブラハムとサラとの間に生まれた待望の息子、「ひとり子」イサクを、「全焼の供犠」として「ささげよ」(*'lh hif.*)というのである。「全焼の供犠」(*'ōlāh*)とは、語根 *'lh* 「(低い位置から高い位置へと)上る」, 「上がる」に由来する言葉で、犠牲を焼いてその煙を天に昇らせることを表す⁽¹⁴⁾。「ひとり子」を「全焼の供犠」として「ささげる」話として思い起こされるのは、士師エフタが、自分が立てた誓願のゆえに、自分の一人娘をささげることになった『士師記』11章の物語である(特に31.34節を参照)⁽¹⁵⁾。

本章句内ではまた、「行く」(*hlk*)という動詞が繰り返し現れる(2.3.5.6.8.13.19節)。特に、2節における「行くのだ」(*læk l'kā*)という命令は、『創世記』12章1節において、神がアブラハムに対し、父の家から、神が示す地へと行くよう指示する表現と同一で、この表現は旧約聖書中、この二箇所にはしか見られない。これら二つの箇所の間の密接な繋がりが示唆されていよう⁽¹⁶⁾。

続く3-8節は、神に指示された「その場所への道のり」である。アブラハムは早速、行動に移る。早朝に起き、ロバに荷を乗せ、二人の若者たちと共に息子イサクを連れて出立する(3節)。三日目、遠くに「その場所」を見ると、アブラハムは若者たちとロバを残し、父子二人となる(4-6節 a)。「二人は一つになって行った」(6節 b と 8節 b)。この表現によって、父と子の二人だけの道程が枠付けられると同時に⁽¹⁷⁾、これに挟まれる形で、父と子の間の唯一の会話が置かれている。

彼(=イサク)は言った、「わが父よ」。
すると彼(=アブラハム)は言った、「はい私だ、わが息子よ」。(7節)

この父子のやりとりの冒頭は、1節ならびに11節における神ないしヤハウエの御使いとアブラハムのやりとりを想起させる⁽¹⁸⁾。

かれ(=神)は言った、「アブラハムよ」。
すると彼(=アブラハム)は言った、「はい私だ」。(1節)

かれ(=ヤハウエの御使い)は言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。
すると彼(=アブラハム)は言った、「はい私だ」。(11節)

アブラハムは7節において、神からの声に応答するのに等しく、自らの子の声に対し、

父としてこれに応答するのである。特に、「わが父よ」という問いかけに対して「わが息子よ」と、いずれも「わが」という人称接尾辞を伴って相手に呼びかけている点が目を引く。そこに相手と自分の親密で個人的な結び付きが見て取れよう⁽¹⁹⁾。

息子イサクの問いは、全焼の供犠のために必要な羊の所在を尋ねるものであった。それ以外のものはすべて揃っていたからである(7節 b)。これに対する父アブラハムの答えは、全焼の供犠の羊は神が自らのために「見るであろう」(*yir'āh*)という一言であった(8節 a)。これは、14節 a で付けられることになるその場所の名「ヤハウエ・イルエ」(*yhwh yir'āh*)と呼応する。これは、「ヤハウエが見るであろう」を意味する⁽²⁰⁾。その直後、同じ語根 *r'h* のニファル形が用いられ、その場所が「ヤハウエが顕れる」(*yhwh yerā'āh*) 山にあると言われる⁽²¹⁾。これらの箇所では、語根 *r'h* が神を主語としつつ、繰り返されているのが分かる⁽²²⁾。

9-14節で語られるのは、いよいよ到着したその場所で起こったことである。イサクをささげるための準備が整えられ、アブラハムが刃物を手に取り、息子をいざ屠らんとしたとき(9-10節)、ヤハウエの御使いが天からアブラハムに呼びかける。それは、息子を屠るのを止めさせる声であった(11-12節)。ヤハウエの御使いによる呼びかけの冒頭は、上に引用した言葉である(11節)。この言葉は、1節における神の言葉と共通する。いずれもその後続くのは命令であるが、その中身が異なる。一方は、「ひとり子イサクを全焼の供犠としてささげよ」というもの、そして他方は、これを打ち消すものになっているのである。

ヤハウエの御使いの声を聞いた「アブラハムは、彼の目を上げて見た」と言われる(13節 a)。この表現は、全く同じものが4節に出る。それによって、両箇所であブラハムが「見

たもの」の相違が際立つ。4節において見たのは、イサクをささげるべき「場所」であり、13節において見たのは、そのイサクに代わってささげるべき「雄羊」であった。この雄羊は、以前からそこにいたかもしれないが、それまでアブラハムの目に留まっていなかったものであった。アブラハムは、彼の息子の代わりに、この雄羊を全焼の供犠としてささげる(13節 b)。この「ささげる」の原語は、「全焼の供犠」(*'ōlāh*, 2.3.6.7.8.13節)の語が由来する語根 *'lh* のヒフィル形で、既に2節の神の言葉にも出ていた。すなわちこの動詞によって、神による命令と、アブラハムによるその遂行が対比されると共に、全焼の供犠としてささげられるものの相違が際立つ。2節では「愛するひとり子である息子イサク」をささげるよう命じられたが、13節で実際にささげられたのは、そのイサクに代わる「雄羊」であった。

物語を締め括るのは、15-19節のエピローグである⁽²³⁾。まずはヤハウエの御使いによる天からの再度の呼びかけがある(15-18節)。アブラハムの行為が改めて確認され、「あなたの息子、あなたのひとり子を惜しまなかった」との評価が加えられる(16節 a)。これと全く同じ言い回しが、12節 b におけるヤハウエの御使いの言葉にも現れる。12節 b の後には代替の雄羊が用意され(13節 a)、16節 b の後には祝福と約束が語られる(17-18節)。神による祝福と子孫繁栄、そしてその子孫が諸国民の祝福の中心になるという約束である⁽²⁴⁾。

19節では、彼らが、待たせていた若者たちも含めて、ベエル・シェバに「一つになって行った」と言われる。この表現は、6節 b と 8節 b における父子二人の道程を想起させる。物語は、最後にアブラハムがベエル・シェバに住んだことを述べて幕を下ろす。

これまで見てきたように、本章句では、さまざまな表現が繰り返されることで、四つの

段落が互いに巧みに組み合わせられ、さらにそれぞれの局面における個々の描写が密接に関連付けられていることが分かる。その一方で、人物描写の面においては非常に簡潔で抑制されており、行為者や話者の感情が語られることがほとんどない。わが子をささげよと命じられ、それを実行に移そうと行動するアブラハムがどんな気持ちであったのか、父に連れられ、屠られる寸前にまで至ったイサクがどんな気持ちであったのか、物語はそれらを明確な形で語り出そうとはしていない⁽²⁵⁾。

2. 鍵語と主題

本章句内には、文法的に見て特異な点はいくつかある。聖書ヘブライ語の構文における基本的な語順は、動詞―主語であるが、この原則から外れて、主語―動詞の順になっている箇所が五つあるのである。このような倒置によってもたらされるのは、前置きされた主語の強調である⁽²⁶⁾。その一つが、5節の「私とその若者はあそこまで行く」というアブラハムの言葉である。「私とその若者」を強調することで、それまで同行していた二人の若者たちをその場に留まらせるよう促している。「その若者」(*hanna'ar*)の語は、上述のように、いくつかあるイサクの呼び表わし方の一つで、本章句の中では、もう一箇所、ヤハウェの御使いがアブラハムに対し、息子に手を下すことを制止する際にのみ用いられている(12節 a)。

主語―動詞の順になっている、それ以外の四箇所は、いずれも神ないしヤハウェを主語とする文章である。

1節 a 神はアブラハムを試みた(*nsh pi.*)

8節 a 全焼の供犠のための羊は、神がかれのために見るであろう (*r'h*)

14節 a ヤハウェ・イルエ (ヤハウェが見

るであろう) (*r'h*)

14節 b 神が顕れる (*r'h nif.*) 山

1節 a ならびに14節 a.b の文章は、物語の語り部分である。8節 a の文章は、アブラハムが息子イサクに語る言葉の中に見られる。物語の展開上も、また語り手の意識上も、これらの箇所にも力点が置かれていることは間違いないであろう。他ならぬ神ヤハウェが行為の主体者として「試みた」(*nsh pi.*)のであり、また「見る」(*r'h*)ないし「顕れる」(*r'h nif.*)というのである。後者三箇所の間に見られる共通の語根 *r'h* による密接な関連については、上に述べた通りである。

語根 *r'h* は更に、2節に出る「モリヤ」(*hammōrīyyāh*)の語とも関わる⁽²⁷⁾。アブラハムは息子イサクを全焼の供犠としてささげるために、「ヤハ(ウェ)が見ること」を意味し得るこの地へと、彼を連れて行くのである。このモリヤの語は、旧約聖書中、『歴代誌下』3章1節にもう一度現れる。それによれば、ソロモン王が、モリヤの山に神殿を建てたとされている。これにより、エルサレムの町がモリヤと重ね合わされている⁽²⁸⁾。

構文上の特異点とも相まって、本章句の理解の根幹に触れる語彙の一つが、1節における「試みる」(*nsh pi.*)の語と思われる⁽²⁹⁾。

1 これらの事の後のことである。

神はアブラハムを試みた (*nsh pi.*)。

かれは彼に言った、「アブラハムよ」。

すると彼は言った、「はい私だ」。

2 かれは言った、「さあ取れ、あなたの息子を、あなたが愛するあなたのひとり子を、イサクを。そしてモリヤの地に行くのだ。

そしてそこで全焼の供犠として彼をささげよ、わたしがあなたに言う山々の一つで」。

「神はアブラハムを試みた」という最初の

言葉によって、本章句が導入されていると同時に、物語全体の主題が提示されている。物語はその冒頭から、以下に続く一連の出来事が、神によるアブラハムへの「試み」であったと明言する。すなわち、アブラハムに襲いかかるのは、負に満ちたる暗い運命ではなく、神によって催される試験であるというのである⁽³⁰⁾。但し、このことを知るのは、神ないし読み手としてのわれわれだけであり、登場人物であるアブラハム自身には伝えられない。それと同時に、この情報によって、われわれ読み手にのみ、ある緊張が生じる。アブラハムは果たして神によるこの試験に合格できるのか、ということである。また、これが一体何を見るための試験なのかということも、この時点では、われわれ読み手にもまだ明かされていない。

旧約聖書において、人間に対する神ヤハウェによる「試み」が描かれるのは、本箇所のように留まらない。その際、神によって試みられるものを見ると、「神の戒め／命令を守るか否か」(出15:25, 16:4, 士2:22, 3:14), 「神を愛するか否か」(申13:4)であるとされ、また神は人を試みて「心にあることを知る」(代下32:31)と言われる。神による「試み」の理由が述べられる箇所もある。

モーセは民に言った、「恐れるな、あなたたちを試みる (*nsh pi.*) ために、神は来た。かれの畏れ (*vir'āh*) があなたたちの前にあり、あなたたちが罪を犯さないためである」。(出20:20)

神が人間を「試みる」のは、その人間に神の「畏れ」があるかを確かめるためだというのである⁽³¹⁾。ここに出る「畏れ」(*vir'āh*)の語に通ずるものが、われわれの章句にも見られる。12節において、ヤハウェの御使いがアブラハムに語る言葉の中で、アブラハムが「神を畏れる者」(*yerē' ʾlōhīm*) であるこ

とが分かったというのである。ここに至ってはじめて、われわれ読者は、神による試験の理由を、アブラハムと共に知らされる。それは、アブラハムが「神を畏れる者」であることを確かめるためのものであった。

神がその従者の忠実さを「試みる」ということに関して、旧約聖書内で特に注目に値するのは、『ヨブ記』1-2章のプロローグ部分である⁽³²⁾。『ヨブ記』は、次のような一文で始まる。

ウツの地にある人がいた。彼の名はヨブであった。その人は、全き者で、まっすぐで、神を畏れる者 (*yerē' ʾlōhīm*) で、悪から逸れていた⁽³³⁾。(ヨブ1:1)

この導入の後に展開される神とサタンのやりとりの結果、ヨブには数々の災いが襲いかかる。読み手と登場人物との間で、与えられる情報に差異があるのは、このヨブの場合も同じである。冒頭で読み手に知らされる神とサタンの間のやり取りは、ヨブには全く与り知らないものである。登場人物には明かされないが、この物語が、荒唐無稽な暴虐を意図したものではなく、あくまでも「試み」であったというのである⁽³⁴⁾。

3. 黙従に見る敬虔

しかしながら、神に従うことが、わが子に手をかけることになる、「子を愛すること」と「神の言葉に従うこと」の対立、このあまりに究極的な「試み」が、われわれにとってなお、躓きとなろう。なにもそこまで極端な形で試みなくとも、と思われるかもしれない。しかしよく考えてみると、どこまでが一般的な試みで、どこからが特殊な試みなのであろうか。二つの相反する価値観が衝突し、そのいずれもが重要でありつつも、どちらか一方を選択しなければならないという状況、「自

分の信念に従って行動すること」と「自分の大切なものを守るために行動すること」の間の葛藤は、程度の差はあれども、われわれは日常的に経験していないだろうか。ある座視すべからざる社会的な不正を目の当たりにしたとき、不正の告発という己の信念に従うことが招来するこの地上の生における艱難を予期しつつも、なおその信念を貫くのか、あるいは自分の今守るべきものを優先して、そのような不正がはびこる現状を黙認するのか。われわれが生きる日常では、意識するしないにかかわらず、実はこうした選択が無数に繰り返されている。

相反する価値観の衝突とその狭間で葛藤という図式は、新約聖書の中にも見て取ることができる。例えば、『マルコによる福音書』8章34-36節である（マタ10:38-39、ルカ9:23-25、14:27も参照）。

34 それから、彼（＝イエス）は群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言った、「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。
35 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。
36 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。

ここでは、「イエスに従う」ためには、「自分を捨て、自分の十字架を背負う」ことが求められている。「十字架を背負う」とは、当時の世界を支配下に収めていたローマ帝国に対する政治犯として処刑される備えをすることである⁽³⁵⁾。それは、国家反逆の非国民として侮蔑・殺害されることに等しい。続く35節の言葉が、より一層われわれを苦しめる。「自分の命を救う」ことと、「福音のために命を失う」ことが、天秤の両皿に置かれているのである。そんな岐路に立たされたとき、

われわれは一体何を基準にして一方を選び、それを実行に移すべきなのであろうか。

息子イサクから全焼の供犠のための羊の所在を問われた父アブラハムの答えは、それは「神が見るであろう」というものであった（8節）。これは事を成し遂げんがための苦し紛れの嘘なのだろうか。二人の若者たちを残して父子二人になろうとする時に語るアブラハムの言葉は、「私とその若者はあそこまで行く。われわれは礼拝して、あなたたちのもとに帰って来る」であった（5節）。5節と8節におけるこのアブラハムの言葉は、「はい私だ」の以外に見られるアブラハムの唯一の会話部分である。ささげるべき全焼の供犠は神自身が見出すのであり、待たせている二人の若者たちのもとに、父と子の二人で戻って来るというのである⁽³⁶⁾。本章句でも数少ないアブラハムのこれらの言葉の中には、自分が行おうとすることに対する確信と、それを支える神への信頼が見て取れよう。本章句において際立っているのは、すなわち、黙従の中に現れたるアブラハムの敬虔である。

われわれは先に、本物語と『創世記』12章との関連性について確認した。アブラハムの人生遍歴はまさに、この『創世記』12章に始まる。そこでもまたアブラハムは、神ヤハウェから「あなたの父の家から、わたしがあなたに見せる(*r'h hif.*)地へと行くのだ(*laek l'ka*)」と呼びかけられ（1節）、神が彼に語ったこの言葉通りに行動している（4節）⁽³⁷⁾。この命令から実行への間にも、アブラハムは一言も言葉を発することがなく、彼が逡巡した様子は全く見られない。神に対する信頼、またその神から与えられた約束への確信が彼を貫いているのである。

4. 黙従に見る盲信

アブラハムによる一連の行為が、神の言葉に対する彼の従順さを示すのと同時に、そこ

に得体の知れない近寄りがたさを覚えることもまた事実である。それは一体なぜなのだろう。これを理解するためには、『創世記』22章1-19節の周囲の文脈を視野に入れる必要がある。本物語は、そのすぐ前に配置された「ハガルとイシュマエルの追放」(創21:9-21)の場面との間に、物語の展開やそこで用いられている表現に、さまざまな類似点や共通点が見出されるのである(図表2参照)⁽³⁸⁾。

『創世記』21章9-21節の物語の背景には、妻サラの子イサクが生まれたことに伴って生じたイシュマエルとイサク、更にはハガルとサラの間の確執がある。物語は、イサクに対するからかいを契機に、サラがハガルとイシュマエルを追放するようアブラハムに求めることで動き始める(9-10節)。妻のこの要求に苦しむアブラハムに対し(11節)、神が語りかける(12-13節)。それは、苦しまず、妻の言葉に従うよう命じるものであった。神の言葉がその後のアブラハムの行動を促すのは、われわれの章句の1-2節も同じである。異なるのは、21章の物語では、それと同時に、追放される息子にも予め神からの祝福が約束されているということである⁽³⁹⁾。続く14節の「アブラハムは朝に早く起きて(*škm*)、……を取った(*lqh*)」という表現は、22章3節と共通する。そのようにして「行った」(*hlk*)のは、ここではアブラハムとイサクではなく、ハガルとイシュマエルである。彼らがさまよ

った荒野は、「ベエル・シェバ」にあったと言われる(14節b)。そこは、22章19節において、アブラハム一行が一連の出来事の後に居を構えた場所である。

21章15-19節で描かれるのは、その荒野にて起こったことである。持参した水が無くなり、ハガルとイシュマエルが死線をさまよう様子は(15-16節)、アブラハムがイサクを屠らんとする場面と響き合う(22:9-10)。極限の状態において、「神の御使いが天から呼びかけ」(17-18節)、それによって死線から解放される(19節)という展開は、22章でも同じである(11-12.13節)。その際、危機的状況からの解放の象徴(21章の場合は井戸、22章の場合は身代わりの雄羊)いずれもを「見た」(*r'h*)と表現しているのにも、相互関係が認められる(21:19, 22:13)。二つの物語はどちらも、ある場所への定住(*yšb*)によって締め括られている(21:20-21, 22:19)。

22章における登場人物の一人であるイシュマエルは、その名によって呼ばれることはなく、「ハガル／仕女の息子」(*bēn hāgār/hā'āmāh*, 9.10.13節), 「息子」(*bēn*, 11節), 「その若者」(*hanna'ar*, 12.17.18.19.20節), 「その男児」(*hayyaelād*, 14.15.16節)と、イサクと同じようにさまざまな呼ばれ方をしている⁽⁴⁰⁾。とりわけ、神ないし神の御使いが語った言葉の中で用いられている「その若者」

21章	22章
9-11節 妻サラの要求, アブラハムの苦悩	——
12-13節 神の言葉(命令と約束)	1-2.15-18節
14節 早朝起床, 荷造り, 出立	3節
15-19節 荒野で起こったこと 15-16 死線のさまよい 17-18 天からの神の使いの声 19 死線からの解放	9-14節 4.9-10節 11-12.15-18節 13節
20-21節 定住	19節

図表2 創21:9-21の構成と22章との比較

(*hanna'ar*) という表現は、22章12節でのヤハウェの御使いによる言葉におけるイサクの呼び表し方を思い起こさせよう。

アブラハムが、ハガルとイシュマエルを家から「去らせた」ことを表すのに用いられているのが、動詞 *slh* 「送る」、「遣わす」である (21:14)。これと同じ動詞が用いられて、22章では、ヤハウェの御使いがアブラハムに対し、刃物を持ったその手をイサクに「遣わすな」(否定辞 + *slh*) と言う (12節)。どちらも、アブラハムが「遣わす」対象の生死が関わっていることが分かる。アブラハムは、「遣わす」ことによって、自分の跡継ぎの候補の一人であった「息子」イシュマエルを失っているのである。その後に続くイサクの献供は、刀を持った自らの手を「遣わして」、後に残された「ひとり子」も失わんとする物語なのである。

こうした共通点は、多分に意識的なものであろう。すなわち、物語の語り手は、この二つの物語を対照させて読むよう意図しているのである。それゆえに、より一層引き立つのが、両者の相違点である。21章の物語は、22章とは異なり、登場人物たちが実に感情豊かに描かれている。妻サラから、自分の息子イシュマエルを追放するよう迫られたアブラハムは、非常に「苦しんだ」(*r'v*) と言われ (11節)、神はそんなアブラハムに対し、「苦しむな」と声をかける (12節)。また、わが子が死なんとするさまを見るに絶えず、その子を遠くに置いた母ハガルは、悲痛な声を上げる (16節)。いずれも血の通った人間として、苦悩を抱え、悲嘆を吐露する存在として描き出されている。それに比べると、22章のアブラハムはほとんど言葉を発することなく、無感情にただ淡々と神からの命令を遂行しようと突き進んでいるように描かれているさまが明らかとなる。

22章においてアブラハムが口にする言葉が神への信頼に満ちたものであればあるだ

け、それ以外の沈黙の行為にはむしろ、彼の盲信的な一心不乱さが増し加わる。ハガルが、わが子が死ぬのを「見る」(*r'h*) ことはできないと言って、「遠く離れる」(*rhq hif.*) のに対し (16節)、「遠く」(*rahōq*) にイサクをささげるべき場所を「見て」(*r'h*) (22:4)、むしろそこへと向かってゆくアブラハムの姿には戦慄さえ覚える。その「信仰」ゆえに唯一の子でさえ躊躇いなく屠ろうとするアブラハムに対して、神は、その使いを介して、止めに入らざるを得なかったかのように見える。そもそも神が行おうとしたのは「試み」であったがゆえである。

アブラハムは、時として神ないしその御使いに対しても多弁であり、その感情を露わにすることもある。『創世記』15章では、幻の中で語りかける神ヤハウェに対し、他ならぬ神が彼に子孫を与えなかったため、彼の家の子が後を継ぐことになると言う (2-3節)。神はこれに対して、家を継ぐのは彼から生まれ出る者であり、彼の子孫は天の星のようにその数を増すと約束する (4-5節)。こうしたやり取りを経てはじめて、アブラハムはヤハウェを「信じた」(*'mn hif.*) のである (6節)。

またアブラハムはある時、三人の御使いの訪問を受け、暴虐の町ソドムを滅ぼす神の計画を聞かされる (創18章)。これに対して、アブラハムは神ヤハウェの前に進み出て、次のように訴える。「あなたは義人を悪人と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に義人が五十人いるならば、彼らのためにお赦しにはならないのですか。全世界を裁く方は、正義を行われるべきではありませんか」(23-25節)。神はこの言葉に応え、義人が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦すと言う。アブラハムはその後、粘り強い交渉でもう十人、もう十人と数を減らし、ついに義人が十人いれば、町は滅ぼされないことになる (27-32節)。結局のところ、その後にソドムの町は滅ぼされてしまうが(創19章)、

神による計画・決断でさえも絶対不変のものではなく、対話による交渉によって妥協が行われる余地のあるものであることが示されている。

本物語においては、神に対して何も言わず、ただその言葉に従うアブラハムの姿が際立っている。アブラハムの一連の行為が、神への「信頼」に基づくものであった一方で、この物語は同時に、その「信頼」なり「信念」を寄せる神とは一体何者なのか、ということにも大きな省察が求められていると思われる。神の名の下に、ある行為が称賛されていればいるほど、その重要性や必要性が増すのではなからうか。アブラハムが「神の言葉」に黙従することで呼び覚まされるおぞましきは、まさしくそのことの証左である。立場が上の者が言うことに何の疑いも抱かず、ただそれを右にも左にも逸れずに実行しようとするのは、単なる盲信である。

おわりに

「わが子をささげよ」と命じられたアブラハムには、それが神の「試み」であることは知らされなかった。このことは、しかし、読み手であるわれわれが先の分からない日常を生きる中で、自分自身に、また自分の周りにさまざまな出来事が襲いかかる時にも全く同じではないだろうか。『創世記』22章1-19節に収録された「アブラハムのイサク献供」の物語は、そのような状況において、われわれ自身がどう振る舞うべきなのか、またそうした振る舞いが何に基づかんとしているのか、ということについて常に心を配るよう教えている。

〔出典〕

図表1: H. -P. Stähli, *Antike Synagogenkunst*, Stuttgart 1988, 63.

図表2: 筆者作成

〔注〕

- ① この物語は、アブラハムがイサクを縛って神にささげようとした創22:9に基づいて、ヘブライ語で「縛り」を意味するアケダー（“qêdāh”）とも呼ばれる（英語では、Binding of Isaac）。
- ② 創22:1-19をめぐるこれまでの諸研究については、L. Kundert, *Die Opferung/Bindung Isaaks*, 2 Bde. (WMANT 78-79), Neukirchen-Vluyn 1998; G. Steins, *Die Bindung Isaaks im Kanon (Gen 22). Grundlagen und Programm einer kanonisch-intertextuellen Lektüre. Mit einer Spezialbibliographie zu Gen 22* (HBS 20), Herder 1999; 関根清三編著『アブラハムのイサク献供物語—アケダー・アンソロジー』日本基督教団出版局、2012年など参照。
- ③ 『カント全集〈18〉諸学部争い・遺稿集』、角忍他訳、岩波書店、2002年。
- ④ 『キルケゴール全集〈第5巻〉おそれとおのき・二つの教化的講話』梶田 啓三郎訳、筑摩書房、1962年。
- ⑤ ロシア・サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館所蔵。ほぼ同一の寸法・構図のものが、ドイツ・ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに所蔵。
- ⑥ ベト・アルファのモザイクについては、N. Avigad, *The Mosaic Pavements of the Beth-Alpha Synagogue and Its Place in the History of Jewish Art*, in: *The Beth-Shean Valley. The 17th Archaeological Convention*, Jerusalem 1962, 63-70 (Hebrew) 参照。
- ⑦ W. Dietrich / C. Link, *Die dunklen Seiten Gottes*, Bd. 2: Allmacht und Ohnmacht, Neukirchen-Vluyn 2004, 75ff 参照。
- ⑧ C. Westermann, *Genesis* (BKAT I/2), Neukirchen-Vluyn 1981, 435; T. Veijola, *Das Opfer des Abraham – Paradigma des Glaubens aus dem nachexilischen Zeitalter*, in: ders., *Offenbarung und Anfechtung. Hermeneutisch-theologische Studien zum Alten Testament* (BThSt 89), Neukirchen-Vluyn 2007, 100f; M. Köckert, *Abraham. Anhnvater – Vorbild – Kultstifter* (BG 31), Leipzig, 2017, 194 など参照。
- ⑨ この物語は、伝統的にエロヒストに属する

- とされ、古い時代の人身御供を背景に、代替の動物犠牲による人身御供の解消の根拠としての機能が見出されてきた（最近では、E. Noort, *Genesis 22. Human Sacrifice and Theology in the Hebrew Bible*, in: E. Noort / E. Tigchelaar (Hg.), *The Sacrifice of Isaac. The Aqedah (Genesis 22) and its Interpretations* (TBN 4), Leiden u.a. 2002, 6ff; H.-P. Müller, *Genesis 22 und das mlk-Opfer. Erinnerung an einen religionsgeschichtlichen Tatbestand*, in: A. Lange / K. F. D. Römhild (Hg.), *Wege zur Hebräischen Bibel. Denken – Sprache – Kultur. In memoriam H.-P. Müller* (FRLANT 228), Göttingen 2009, 201ff など)。しかし最近では、物語を構成する各表現の文学様式、神学的な省察、個々の単語やモチーフを考慮に入れて、捕囚期以後に年代付ける研究者が少なくない（例えば、Veijola, *Opfer*, 113ff; A. Michel, *Gott und Gewalt gegen Kinder im Alten Testament* (FAT 37), Tübingen 2003, 275; T. Naumann, *Die Preisgabe Isaaks. Genesis 22 im Kontext der biblischen Abraham-Sara-Erzählung*, in: B. Greiner / B. Janowski / H. Lichtenberger (Hg.), *Opfere deinen Sohn! Das ‚Isaak-Opfer‘ in Judentum, Christentum und Islam*, Tübingen 2007, 26ff など)。
- ⁽¹⁰⁾ B. Janowski, *Ein Gott, der straft und tötet? Zwölf Fragen zum Gottesbild des Alten Testaments*, Neukirchen-Vluyn 2013, 128参照。
- ⁽¹¹⁾ Steins, *Bindung*, 107参照。
- ⁽¹²⁾ Veijola, *Opfer*, 106; Janowski, *Gott*, 125参照。
- ⁽¹³⁾ 創22:1-19の文学的な構成については、Westermann, *BKAT I/2*, 434f; C. ヴェスターマン『創世記 I』（コンパクト聖書注解）山我哲雄訳，教文館，1993年，366頁；G. von Rad, *Das erste Buch Mose. Genesis* (ATD 2-4), Göttingen 1981, 189 [G. フォン・ラート『創世記上』（ATD 聖書注解），山我哲雄訳，ATD・NTD 聖書注解刊行会，1993年，422頁]；I. Willi-Plein, *Das Buch Genesis. Kapitel 12-50* (NSK-AT 1/2), Stuttgart 2011, 124ff など参照。
- ⁽¹⁴⁾ 語根 *ʾlh* の語義については，G. Wehmeier, *Art.*, *ʾlh*, in: *THAT II* (1995⁵), 272ff; D. Kellermann, *Art.*, *ʾolāh/ʾōlāh*, in: *ThWAT VI* (1989), 105ff; C. Radebach-Huonker, *Opferterminologie im Psalter* (FAT II/44), Tübingen 2010, 43ff.67ff など参照。
- ⁽¹⁵⁾ 創22章と士11章の関連をめぐるのは，T. C. Römer, *Why Would the Deuteronomists Tell About the Sacrifice of Jephthah's Daughter?*, *JSOT* 77 (1998), 32f; M. Bauks, *Jephtas Tochter. Traditions-, religions- und rezeptionsgeschichtliche Studien zu Richter 11,29-40* (FAT 71), Tübingen 2010, 115ff など参照。
- ⁽¹⁶⁾ Westermann, *BKAT I/2*, 436f; Steins, *Bindung*, 137ff など参照。
- ⁽¹⁷⁾ Westermann, *BKAT I/2*, 439f など参照。
- ⁽¹⁸⁾ 本箇所と出3:4のモーセの召命における神の呼びかけとモーセの応答との関連について，Steins, *Bindung*, 209ff; C. Berner, *Die Exoduserzählung. Das literarische Werden einer Ursprungslegende Israels* (FAT 73), Tübingen 2010, 85 など参照。
- ⁽¹⁹⁾ Veijola, *Opfer*, 109。
- ⁽²⁰⁾ BHS 校訂者 (O. Eißfeldt) は，14節後半との関連から，これを *yerā ʾəh*「(ヤハウエが)顕れる」と読むよう提案している。しかしながら，本文批評上は支持されない。
- ⁽²¹⁾ ちなみに，ペシッタ（シリア語訳）やウルガタ（ラテン語訳）では，「主が見るであろう」となっており，前の二箇所と同じ語形で理解していると見られる。
- ⁽²²⁾ J. Jeremias, *Die “Opferung” Isaaks* (Gen 22), in: ders., *Studien zur Theologie des Alten Testaments* (FAT 99), Tübingen 2015, 194f など参照。なお，神ヤハウエの顕現を表す動詞 *rʾh nif.* は，創12:7でも用いられており，創12章と22章の結び付きを示している。
- ⁽²³⁾ 15-18(19) 節は，編集史的に二次的な付加であるとの理解が多い。R. Kilian, *Isaaks Opferung. Zur Überlieferungsgeschichte von Gen 22* (SBS 44), Stuttgart 1970, 27ff など参照。しかし本稿では，本箇所の編集史的な問題には立ち入らない。15-19節を二次的な付加とする意見についての批判的な検証について，最近では，関根清三「アケダーの神髄を訪ねて—旧約学と哲学の協働—」，『旧約学研究』第10号（2013年），91頁以下参照。
- ⁽²⁴⁾ 創12:2.7, 15:1-21, 17:4-8, 26:3-5を参照。
- ⁽²⁵⁾ 紀元後1世紀のユダヤの歴史家ヨセフスは『ユダヤ古代誌』の中で，登場人物たちの心境や対話を想像力豊かに描いている。Josephus, *Antiquitates Judaicae*, I, xiii, 222ff [『ユダヤ古代誌 I』秦剛平訳，ちくま学芸文庫，1999年，90頁以下] 参照。
- ⁽²⁶⁾ 主語—動詞の語順による主語の強調については，R. Meyer, *Hebräische Grammatik IV*, Berlin/

New York 1972, § 91,2; C. Brockelmann, *Hebräische Syntax*, Neukirchen-Vluyn 2004², § 48; P. Joüon-T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew*, Rome 2005, 155m など参照。

⁽²⁷⁾ Westermann, BKAT I/2, 437などは、この語は、犠牲をささげる地としてのエルサレムのために後代に挿入されたと見る。ペシッタ（シリア語訳）では「アモリ人の地」とされている。

⁽²⁸⁾ S. Japhet, *2 Chronik* (HThK.AT), Freiburg/Basel/Wien 2003, 48参照。

⁽²⁹⁾ 語根 *nsh* の語義については、G. Gerleman, Art., *nsh* pi. in: *THAT* II (1995⁵), 69ff; F. J. Helfmeyer, Art., *nissāh*, in: *ThWAT* V (1986), 473ff; Jeremias, *Opferung*, 191; Veijola, *Opfer*, 116ff など参照。

⁽³⁰⁾ Kilian, *Isaaks Opfer*, 50; Veijola, *Opfer*, 101参照。

⁽³¹⁾ 「神の畏れ」については、J. Becker, *Gottesfurcht im Alten Testament* (Analecta Biblica 25), Rome 1965; H.-P. Stähli, Art., *jr'*, in: *THAT* I (1994⁵), 765ff; H. Fuhs, Art., *yāre'*, in: *ThWAT* III (1982), 869ff など参照。

⁽³²⁾ 創22章と『ヨブ記』の関連については、T. Veijola, *Abraham und Hiob. Das literarische und theologische Verhältnis von Gen 22 und der Hiob-Novelle*, in: ders., *Offenbarung und Anfechtung. Hermeneutisch-theologische Studien zum Alten Testament* (BThSt 89), Neukirchen-Vluyn 2007, 134ff など参照。

⁽³³⁾ なお、ヨブ1:8, 2:3も参照。

⁽³⁴⁾ Veijola, *Opfer*, 101参照。

⁽³⁵⁾ 佐藤研『はじまりのキリスト教』, 岩波書店, 2010年, 42頁参照。

⁽³⁶⁾ Veijola, *Opfer*, 130参照。

⁽³⁷⁾ Steins, *Bindung*, 138f 参照。

⁽³⁸⁾ Jeremias, *Opferung*, 192ff; Steins, *Bindung*, 147ff; Janowski, *Gott*, 134ff; 山我哲雄「ハガルとイシュマエル」, 同著『海の奇蹟—モーセ五書論集』, 聖公会出版, 2012年, 127頁以下など参照。

⁽³⁹⁾ Steins, *Bindung*, 155参照。

⁽⁴⁰⁾ Steins, *Bindung*, 156f 参照。